九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[07]海外大学図書館等視察報告

中野，三敏

今西，祐一郎

古賀，幸成

山口，良子

他

https://doi.org/10.15017/16483

出版情報：海外大学図書館等視察報告. 7, pp.1-47, 2001-04. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

オーストラリア

江藤　弘史
情報管理課雑誌情報掛

訪問国：　オーストラリア

訪問先：　オーストラリア国立大学図書館
　　モナシュ大学図書館

期　間：　平成１２年１１月１８日～１１月２５日

オーストラリアの大学図書館について

1．はじめに

平成12年11月16日から同25日までの日程でオーストラリア国立大学及びモナシュ大学を訪問した。季節が日本とは逆になるオーストラリアでは、春から夏へと向かう季節であった。この季節、オーストラリアではサマータイムが適用されており、平常日本との1時間の時差が2時間になっている。この位であれば、海外への旅が2度目の自分でも特に意識しなくてもよい程度である。但し、この時差のおかげで日本時間の朝3時に機内食を食べさせられることにはなるのだが。

2．オーストラリアの予算制度について

オーストラリアの大学では、オーストラリア国立大学のみが国から直接予算が配分される。これはブロックファンディングと呼ばれているもので、オーストラリア国立大学に「国立」と入っているのはその予算が存在するからである。その他の大学は、学生数に比例して州政府から配分される予算により運営されている。

このほかに、日本で言えば科学研究費補助金の様な、競争型の予算も基礎研究のプログラムや企業等との共同研究プログラム等数種類存在する。特筆すべきは、こうした予算には、研究者に対して配分される研究用の予算に加えて、それに付随する設備費等の運営に使用できる予算も大学へと入る仕組みになっている。このため今回訪問した両大学とも積極的に応募するよう指導されているとのことであった。

聞いたところによると、オーストラリアの大学は、日本の様に大学をランキングするという意識は希薄とのことである。学生が大学を選ぶ際は、家の近くに自分の勉強したい学部を持つ大学があれば、そこへの入学を希望する。また、オーストラリアの大学では、定員というのは特に決められていないとのこと。自分の様な単純な思考では、収入の面から見れば受入可能なだけ学生を受け入れればよいのではないかと思う。しかし、短期的には収入の増加に繋がるかもしれないが、こうしたことを行えば講義の質が低下する可能性が大きく、長期的に見ると決して得にはならないという考えから歯止めはかかっている様である。

オーストラリアでは、教官数も学生数から決まっており、学生の傾向により教官数の比重も変わってくるとのことである。現在は、コンピュータ関連の学科に人気が集まっている様である。

3．オーストラリア国立大学

3.1. 大学とその環境

オーストラリア国立大学は、オーストラリアの首都キャンベラの市街地にある。キャンベラは、首都のために作られた都市であり、地図で見ると2つの中心から放射線状に街が広がっている。1つの中心「CAPITAL CIRCLE」は国会議事堂を中心として国の機関や各国の大使館が軒を連ねる。他方の中心「CITY CIRCLE」にはホテルや企業のオフィスビルが並んでいた。この街は大変きれいに建物が配置されていたが、夜になると人もまばらになり、車の走る音くらいしかしなくなる。何か静か過ぎる様な気さえし

た。

この大学は、種々の研究機関が集まってできた大学である。そのため基礎研究が主流となっており、この国の基礎研究の中心的存在を担っている。学生数は約１万人。

3.2. 大学の運営について

この大学は、前述の「ブロックファンディング」が予算の主たる部分を占める。これは物価上昇等も考慮したうえで算出されているが、近年20%程度削減されたとのことである。こうした背景から競争型の予算に積極的に参加する様になり、基礎研究の分野では屈指の採択率を誇っている様である。但し、企業等との共同研究のプログラムでは、他大学の後塵を拝している。

3.3. 大学図書館について

①利用者サービス

オーストラリア国立大学図書館では、学生向けに図書館の利用案内を作成している。毎年内容の見直しが行える様に冊子体とはせず、一枚の紙に印刷したものを配布している。図書館からの情報提供には、主にWWWを使用しているとのことであった。

また、従来から教官が指定した学生用文献リストをもとに、一時文献をファイルして閲覧に供していたが、2001年からは電子化してホームページ上で提供する方針であるとのこと。既に電子化されているもの（電子ジャーナル等）についてはリンクして提供するが、電子化されたものが無い場合は図書館で電子化して提供する方針とのことであった。著作権の問題が生じるのではないかとも考えたが、その場では明確な回答を得られなかった。

学生は、入学時に電子メールのアドレスを割り振られており、そのログイン名で大学が提供しているOPACや各種データベースにアクセスすることができる。図書館では、利用者教育の一環として電子メールの使用法についても、説明会を行っていた。オーストラリア国立大学では、WWW経由のOPACは前述のとおりログイン名とパスワードによる利用者認証をおこなっているとのことである。これは、政府からの指導によるものであり、教育機関向けには回線使用料を安く押さえているため一般からの使用を制限すべきとの理由によるものである。但し、従来制限無く提供していたため、代替のサービスとしてtelnet版のOPACについては従来どおりアクセス制限なく利用できる状態となっている。

②収書について

資料の収集はCollection Development Policyに基づき行われるが、教官からの発注が主であるとのことで、図書館で購入しているのはレファレンス関係が大部分を占めている。学生等からの購入希望に対しては、高額図書及び雑誌については委員会の議決を経た後に購入される。しかし、安価なものについては担当者の裁量により、原則的には希望があったもののほとんど全て購入されている。

③CAUL（Council of Australian University Librarians）

CAULは、全豪大学学長協議会に加盟している大学の図書館員による協議会で、1928年に設立された団体である。オーストラリア国立大学にその事務所があり、各種データベースのコンソーシアム形成についての事務を行っている。このコンソーシアムは、費用の配分は学生数を基礎データとして算出される。ある出版社の場合、コンソーシアムを形成することにより20%のディスカウントを得ることができ、さらにCAULでインボイスをまとめることによりさらに10%ディスカウントされるとのことである。

4．モナシュ大学

4.1. 大学とその環境

モナシュ大学は、ヴィクトリア州の州都メルボルンの中心から車で1時間程度の場所にあり、州内の6つのキャンパスのほかにマレーシアや南アフリカにもキャンパスがある。学生へのサービスや留学生の受入に力を入れていた。キャンパス内には映画館やゲームセンターがあり、フリーマーケットが行われることもある。また、留学生への対応として、Monash Internationalという部署を作り、留学生受入の事務処理を行っている。この職員は、携帯電話を当番制で持って留学生からの相談を24時間体制で受け付けるという様なサービスを行っている。さらに、WWWを積極的に利用しており、学生の受講登録もWWWで行うことができる仕組みが作られている。

メルボルンの街は、歴史を感じさせる石造りの教会等と近代的な建物が混在していた。移動にはトラムと呼ばれる路面電車が走っており、市民の足として活用されている。街の造りは、中心部は碁盤の様に縦横にそれぞれ名前のついた通りがあり、その順番さえ把握すればどこへ行くにも大変分かりやすい。また、夜には街の中にある歴史的建造物がライトアップされ、昼の雰囲気とはまた違った幻想的な風景となっている。

4.2. 大学の運営について

モナシュ大学の場合、オーストラリア国立大学とは異なり、学生数に応じて予算が決まる。そのため、留学生を含めた学生を集めるための大学運営を行う姿勢が現れており、企業体の様なイメージさえ感じられた。

4.3. 大学図書館について

①利用者サービス

利用者への広報については、WWWを主に利用しているとのこと。また、学生への利用案内として、学期の初めに各Subjectの司書がガイダンスを行っている。このガイダンスは、授業の中に組み込んでいる場合もある。

学生は、授業料を払うと各自メールアドレスとパスワードを発行される。これはAuthcate account と呼ばれ、大学が購入している各データベースには、これを使用してアクセスする様になっている。オーストラリア国内のみならず、海外からもアクセスが可能となっている。

②収書について

資料の選定については、ここでも教官が主に選定していた。各学科が配布するReading List をもとに収集していた。また、学部学生のために Subject の司書が、教官と連携して選書する場合もあるとのこと。

③CAUL との関係

データベースの購入においては、単独で買うことのできるものは直接ベンダーと交渉してライセンス契約を行っている。また、高価なものについては、CAUL が代表して交渉している。しかし、単独で交渉すれば、もっと安く買えるかもしれないという本音も聞かれた。

契約においては、キャンパス数よりも同時アクセス数を重視している様で、サイトのとらえ方について質問をしたが、特に問題としていないとのことであった。データベースへのアクセス管理を、上記の Authcate account により行っていることによるものかと思われる。

5．おわりに

今回、成り立ちの異なる２つの大学でいろいろな話を聞くことができ、日本の国立大学について違った視点から見直すきっかけを得たような気がする。学生にとって魅力のある大学とはどのようなものか、研究と教育とのバランスをも考えたうえでの組織構成とは、等々一朝一夕には結論の出ない問題ばかりであることは十分に分かっている。しかし、大学職員として、自分も問題点を把握し、どのように対応するのかを自分なりに常々考えておかなければならないことを改めて認識させられた。